

(第3種郵便物認可)

新 聞

20世紀の日本美術

ミカエル・リュッケン著

菊畑 茂久馬

画家



(三好企画・2100円)

脇腹を突いた緻密な研究

近代美術の調査研究に取り組んでいる。また三十八歳、新進気鋭の評論家である。

噂に違わず読みごたえのある本である。西洋人がこれほど日本の美術に対して、緻密な研究と深い読み解きをしているとは、正直云って驚嘆した。これは確かに、日本近代美術史の脇腹を突いてい

文化摂取の日本独自の「弁証法的メカニズム」だと指摘して、これを具体的に解き明かしていく。

当然、西洋モダニズムに模倣追従していった一群には目もくれな

い。「西洋」に食らいつき、抗

築こうとした画家たちに論は集中する。筆頭に高橋由一、彼の絵に強烈な迫真と「意志」の力を、そして岸田劉生には、西洋文明への熱烈な傾倒から立ち直ろうとする「渾身の努力」を、更に村山知義ら先駆けた前衛美術家たちに「日本の美の基準を覆した」革新性を見ている。「西洋」に正面から勇敢に立ち向かった画家たちに、日本独自の創造が結実していく道のりを重ねているのである。

「反芸術」の章では、われら地元福岡が生んだ九州派に、かなりの論を費やしている。「日本列島の西南に位置する大きな島九州の名前をとった九州派」からはじまる論文を読みながら、「九州派」も世界的になったものだ、ちょっと嬉しくなった。南明日香訳。

この本は、フランス国立東洋言語文化研究所のミカエル・リュッケン教授が「二十世紀の日本美術」と題して、同研究所で講義をした記録を基に執筆されている。

フランス語による原書は、パリで二〇〇一年に出版された時から話題になり、翌年は第十九回渡辺・クロード賞を受賞している。

この三月に待望の日本語版が発刊されたばかりである。

教授は一九六九年ジュネーブで生まれ、一九九九年東京日仏会館研究員として来日、その折日本の

書評委員 この一冊

る。西洋人恐るべしと思った。

序章に「西洋から日本へのまなざし」とあるように、西洋と日本の遭遇を主テーマに語られていく。例えば「造形芸術は言語のパリアーに守られた文学と異なり、直接競争に巻き込まれてしまつがために、こうした抵抗のことも活発な場となった。西洋の文化と思想は、アンチテーゼとして、とはいえないダイナミックな形で、日本独自のありようを編み出すのに利用された」。実に際どいところに着目している。更にこれは、外来

変わった都市の喫茶店

どこで読書できるのか

梁木 靖弘

読みたい本は山のければいけない本も追われて、読書がで

の読書は、読書ではは、雑用をさっさとめりこむ体力があつても、何もしなくていい本を一冊選ぶ。それで、フラフラ出かけて、コーヒを飲に読みふける。これろは、名曲喫茶で職がなかったころ、

で半日ねぼぼって翻趣味)をしていた野やりたい仕事をやかつて、喫茶店をする薄暗い洞穴を都市文化は変貌する明るいカフェとなやべり場となる。は、喫茶店から追でければボーのてくる男のようにかをぐるぐる歩い角の喫茶店で、読たい。

本と人

医師の目を通して書いた医学

映画化されてもおかしくないエ  
ンタテインメントだ。

二十七年ほど前、開業した

ろから随筆を書き始めた。「学

読書館

郷土コーナー

はたなく、

々との出会い。そのギャ  
ツプに笑ったり泣いたえ、  
り、ともに旅する気分分 割す  
読めるのは、読者も彼女 邪